修士論文（要旨）
２０１４年１月

台湾離島における植民地時代の日本語

—80 代の蘭嶼の老人の語りを中心に—

指導　佐々木倫子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
212 J 3003
大輪香菊

目　次

第 1 章　研究の動機と背景 1
1.1　研究動機 1
1.2　研究背景 1
1.3　先行研究 3
1.4　本稿の特殊語彙について 4
1.5　研究目的 5
第 2 章　蘭嶼の原住民　タオ族 6
2.1　蘭嶼概要 6
2.2　植民地時代 7
第 3 章　調査の概要 12
3.1　調査協力者 12
3.2　調査方法 13
3.3　文字化について 13
第 4 章　調査結果 1　老人の語りから 15
4.1　日本人名を持つ M1 15
4.2　F1 と F2 の日本語保持要因 21
4.3　M2 と F3 の日本語保持要因 36
4.4　語りにみえる日本語教育 45
第 5 章　調査結果 2　植民地時代以後を中心に 47
5.1　キリスト教伝道と日本語 47
5.2　伝道師 M3 の日本語学習 48
5.3　牧師 M4 の日本語 50
5.4　蘭嶼に定着した日本語 51
5.5　戦後の日本語 55
第 6 章　まとめと今後の課題 57

謝辞
参考文献
参考資料

【キーワード:台湾　原住民　タオ族　植民地時代　蕃童教育所　言語継承　キリスト教】

要　旨

台湾は 1895 年(明治 28 年)から 1945 年(昭和 20 年)までの約 50 年間，日本の植民地であった。その間，台湾全土に学校が設置され原住民も蕃童教育所に通った。その結果，第二次世界大戦の終戦末期には日本人として高砂義勇隊になり南方の前線に向かった人たちもいる。そのような日本統治時代の歴史が台湾の離島である蘭嶼（らんしょ）にも色濃く残り，タオ族にも日本語を話す老人たちがいる。

台湾の原住民は現在 14 民族で約 52 万人である。その内タオ族は約 4000 人で原住民総人口の 1%にも満たない。原住民の母語はそれぞれ異なり日本語が共通言語となったが，タオ族は他の原住民との接触も少なく共通言語としての日本語の役割も必要ないと思われる。本研究では，そのような環境下で，なぜ戦後 70 年近く経つ現在も日本語力が維持されたのかを解明することを目的とする。台湾蘭嶼における植民地時代の教育はどのように行われたのか，彼らの生活の中に日本語がどのように浸透しているのかを，時代の生き証人である 80 歳代の老人たちの語りを中心にみた。

研究は 2010 年から 2013 年までに現地で 5 回行ったインタビュー調査に基づく。協力者は現地においてスノーボール式に得た 21 名(男性 9 名，女性 12 名)である。全て日本語でインタビューを行い，必要であれば稿者が中国語で補った。そこから得られた文字化データから，植民地時代の教育，日本人との関わり，戦後の日本語使用の変化への言及個所を抽出した。

蘭嶼に蕃童教育所(学校)ができたのは 1923 年（大正 12 年）である。学校から遠い児童には宿舎が用意されていた。続いて 2 校目が 1939 年（昭和 14 年）に開校している。教師は警察官で教科は修身，国語，算術，書画，唱歌，実科（農業，手工及び裁縫），就業時間は午前のみであった。

植民地時代に学校教育を受けた老人たちは驚くほど教科書を良く暗唱しており，使用していた教科書『教育所用國語讀本』を特定することができた。長文もスラスラと口から出てくる老人が多く，当時の暗唱教育がいかに徹底していたのかがわかる。また，皇民化教育も徹底しており，神社参拝，国旗掲揚，教育勅語の斉唱が日本国内と同様になされていたことは興味深い。

更に歌の記憶もあげられる。学校で習う唱歌だけでなく，駐屯していた軍人たちが歌う軍歌，また宴会での流行歌などもよく覚えている。その歌の背景も一緒に思い出せるのが歌の大きな影響力であろう。

蘭嶼は離島であったため，軍人や政府関係者たちが島を訪れ，宴会も行われた。その席に「婦人会」として学校卒業後の 10 代の女性たちが駆り出されている。そのため女性は，流行歌や，替え歌なども良く覚えているのである。今でも「東京音頭」は 50 代以上の島民なら誰でも口ずさむほど定着している。こうした歌や踊りは中華民国になっても許され，歌謡大会で日本語の歌を歌ったと語る老人もいた。

タオ族の母語には，表記システムはなく，学校もなかった。植民地時代にようやく教育体制が確立し，学力の優劣を測る基準として日本語力が大きな比重を持つことになった。

植民地時代には優秀な生徒は卒業後に教師となったり，日本人の通訳として重用された者もいる。タオ族にとって日本語が優劣を決定する「威信の言語」となったのではないか。

戦後数年の混乱期には，教育が徹底されず，中国語も学んでいない人たちがいる。そのため，1951 年にキリスト教の布教が始まるが，聖書を読むためには日本語が必要となり，日本語のできるものが伝道師となる。日本語教育を受けていない世代も，台湾人やアミ族(原住民)，スイス人の宣教師から日本語を学ぶようになったのである。日本語はタオ族の間でキリスト教信仰のために必要な言語となっていく。戦後も日本語の優位性が持続しているのである。このように，日本語が「威信の言語」となり，維持，継承されているのではないだろうか。

現在日本語話者は減ってきている。しかし，語彙レベルではクレオールとして定着しているものが多い。タオ語の辞書には外来語として「飛行機」「かばん」などの日本語語彙が 44 語載っているほどである。また片仮名も発音を伝える重要な音声伝達手段として，タオ語の教材にも使用されている。本研究では，日本語がタオ族の言語文化に根付いていることをインタビュー調査から検証した。

参考文献

稲葉直道・瀬川孝吉（1931)『紅頭嶼』生き物趣味の會.

甲斐ますみ（2013)『台湾における国語としての日本語習得』ひつじ書房.

川村湊（1994)『海を渡った日本語－植民地の「国語」の時間－』青土社.

簡月真（2011)『台湾に渡った日本語の現在－リンガフランカとしての姿－』真田真治(監修)，明治書院.

国分直一（1981)『台湾考古民族誌 考古民俗叢書 18』慶友社.

桜井厚（2002)『インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方－』せりか書房.

真田真治（2009)『越境した日本語－話者の「語り」から－』和泉書院.

臺灣總督府（1915)『蕃人讀本』臺灣總督府.

臺灣總督府警務局編（1918)『理蕃誌稿』第一編.

臺灣總督府警務局（1928)『教育所用國語讀本』臺灣總督府警務局.

臺灣總督府警務局（1936－1944)『高砂族の教育』昭和 11 年度－昭和 19 年度.

中生勝美（1994)「台湾蘭嶼島ヤミ族の文化変容」『キリスト教文化研究所研究年報』第 27 号. 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所. pp.1-23

藤崎濟之助（1931)『臺灣の蕃族』國史刊行會.

松田吉郎（2004)『台湾原住民と日本語教育－日本統治時代台湾原住民教育史研究－』晃洋書房.

宮坂生（1933)「紅頭嶼蕃人の覺醒」『理蕃の友』第 3 年 7 月号.臺灣總督府警務局. pp.12

宮本延人（1985)『世界の民俗誌 2 台湾の原住民族－回想・私の民族学調査－』六興出版.

安田敏朗（2011)『かれらの日本語－台湾残留日本語論－』人文書院.

横尾生（1934)「ヤミの王國紅頭嶼(下)」『理蕃の友』第 3 年 8 月号 臺灣總督府警務局. pp.1-4

吉岡英幸監修（2012)『台湾総督府日本語教材集』冬至書房.（原本)臺灣總督府(1902)『臺灣教科用書國民讀本』臺灣總督府

林茂生（2004)『日本統治下の台湾の学校教育－開発と文化問題の歴史分析－』拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター.

王榮基（発行年不詳)『達悟語羅馬拼音初級教材(入門讀本)』台東縣立文化中心.

中華民國聖経公會（1990)『雅美語羅馬字初級讀本 Pacinanawan no tao do pongso a Lomaji』財團法人中華民國聖経公會.

中華民國聖経公會（1998)『雅美語聖経新約』財團法人中華民國聖経公會.

余光弘・童森永（1998)『臺灣原住民史　雅美族史篇』臺灣省文献委員会.

席南嘉斐弄（2009)『達悟族宗教變遷與民族發展』南天書局有限公司.

張海嶼（1992)「蘭嶼宣教史」『民族学研究所資料彙編』第 6 期. pp.145-166

董瑪女・何德華・張惠環編（2012)『達悟語詞典』國立臺灣大學出版中心.

【WEB】

臺灣行政院原住民族委員会「原住民族族語線上詞典」
http://e-dictionary.apc.gov.tw/Index.htm (2013.12.20 検索)